The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中古中世散文作品における感動詞「サテ」の成立 ：前文脈を踏まえない「サテ」について
Author(s)	百瀬, みのり
Citation	詞林. 2018, 64, p. 47-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/70610　　詞林　第64号　2018年10月

中古中世散文作品における感動詞「サテ」の成立

――前文脈を踏まえない「サテ」について――

百瀬　みのり

一．序

一．一．はじめに

本論は中古中世散文作品中で前文脈を踏まえない「サテ」に注目し、その一部が感動詞「サテ」として機能するようになる過程を考察するものである。語構成上では指示副詞「サ」に接続助詞「テ」が付いた「サテ」は中古から

（1）「されど、今はすさまじうなりにてはべるなり」と申す。「すさまじかべき事か、いな」とのたまはせしかど、さてやみにき。（『枕草子』第九五段、一九一頁）

と、文中に置かれて、また

（2）「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。さて、この子のしたりける帯をときてとりて、もたりける文にひき結ひてもたせていぬ。（『大和物語』第一六九段、四一二頁）

と、文頭に置かれて用いられた例が見られる[1]。これらは「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に認められる例であるが、同じく中古には既に

（3）姫君おはすると見るかたに、つつみなく入り給ひて、几帳のもとに寄り給ひて、「さていかがおはします。人あまたさぶらふや」と問ひ給へど、はかばかしき人しなかりければ、おぼほれてのみこそあれ。（『浜松中納言物語』巻第四、二九九頁）

と、「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に認められない例も見られる。

本論ではこのような、その指示する内容が前文脈に具体的に認められない「サテ」に注目し、これを「差し込みのサテ」と名付けてその機能を「サテ」の機能全体の中で位置付ける。そして、「差し込みのサテ」の一部が対話文中の疑問文（話し手の情意、感動を表す文）を導く用法を経てその後「サテ」単独でも話し手の心情を表す感動詞として機能するように

なったことを述べる。

なお、本論において中古中世散文作品とは、中古、中世期に成立したとされる、和文、和漢混淆文作品を指す。

一．二．先行研究と問題の所在

古典語の「サテ」について述べた先行研究には西田（２００１）、岡﨑（２００８）、（２０１０）がある。

西田（２００１）は、『源氏物語』における「サテ」の用法に注目し、「平安時代の和文における指示語「さて」の接続詞的用法には、前文の内容を承けて後文につなげていく用法から、転換ともいえる話題の切り出しの用法まで、その使用例を見出すことができる。しかし、源氏物語の地の文においては、転換の用法が用いられることはなかった。[2]」と述べる。

また、岡﨑（２００８）は、「古代語から現代語への変化の過程で「サテ」はⅠ副詞的用法、Ⅱ接続詞的用法A条件とB列叙・転換の一部の用法を失い、またⅡ接続詞的用法C行動と、Ⅲ感動詞用法を獲得したものと予想される。[3]」と述べ、さらに岡﨑（２０１０）で現代語の「サテ」の用法にも触れつつ、中古から近世の「サテ」の用法について、その歴史的変化を論じ、『源氏物語』、『平家物語覚一本』では見られなかった「サテ」の感動詞的用法が『天草版平家物語』では見られるようになり、その後『浮世風呂』でも確認できたことから、「サテが中世の間に（略）感動詞的用法を獲得した」（岡﨑（２０１０）・七二頁）と述べた。

西田、岡﨑は資料における「サテ」の用法の変化―西田は副詞から接続詞にかけて、岡﨑は副詞から感動詞にかけて―を例を挙げることで説明しているが、元来は副詞として文中ではたらいていた「サテ」が感動詞としてはたらくようになった原因については両者とも特に述べてはいない。そこで本論では中古から中世期に成立したとされる資料中に見られる「サテ」の用例を考察し感動詞「サテ」が成立した経緯、原因について述べ、先行研究を補いたい。

二．考察　「差し込みのサテ」について

二．一．「サテ」の用例数

まず、中古中世散文作品中の「サテ」の用例数を確認する。（表一）は本論で資料とした中古の、（表二）は同中世の散文作品に見られる「サテ」の用例数である。用例は、各資料と現れる文中の位置の別により、【地の文・文頭】、【地の文・文中】、【非地の文・文頭】、【非地の文・文中】分けて示す。ここでいう【非地の文】とは、【対話文】、【心内話文】、【文（手紙）の文】を指すものとする。（以下同。）

資料名は表中では略し、『大和』は『大和物語』、『平中』は『平中物語』、『落窪』は『落窪物語』、『枕』は『枕草子』、『源氏』は『源氏物語』、『堤』は『堤中納言物語』、『浜松』は『浜

（表一）中古「サテ」用例数

位置／資料	地の文・文頭	地の文・文中	非地の文・文頭	非地の文・文中	計
『大和』	38	0	1	0	39
『平中』	35	5	4	0	44
『落窪』	4	1	16	3	24
『枕』	27	8	8	2	45
『源氏』	17	12	40	35	104
『堤』	0	1	5	0	6
『浜松』	2	1	4	5	12
計	123	28	78	45	274

（表二）中世「サテ」用例数

位置／資料	地の文・文頭	地の文・文中	非地の文・文頭	非地の文・文中	計
『住吉』	27	0	3	2	32
『とりかへ』	0	1	4	11	16
『保元』	0	0	3	3	6
『平治』	4	0	1	0	5
『平覚』	29	1	34	5	69
『平天』	45	5	35	3	88
『狂言』	0	0	211	26	237
計	105	7	291	50	453

松中納言物語』、『住吉』は『住吉物語』、『とりかへ』は『とりかへばや物語』、『保元』は『保元物語』、『平治』は『平治物語』、『平覚』は『平家物語』・覚一本、『平天』は『天草版平家物語』、『狂言』は『狂言記』を指す。（以下同。）

また、本論の用例は「サテ」に注目するもので、「サテハ」、「サテモ」、「サテゾ」、「サテナム」、「サテコソ」などの「サテ」に副助詞、係助詞が付いた形式は考察の対象に含めないものとする。

二、二、「サテ」の分類

本論では中古中世散文作品中の「サテ」を以下のように分類する。[4]

①「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に文や句、語などの形で認められる「サテ」。

これは、「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素として文中に示されている具体的な対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」である。ここで

は文中に示されている対象の部分に波線を付して示す。（以下同。）

①―A．文中に置かれる「サテ」。

（4）この呼びに来たりける人の、「筆に墨塗りて来」といひたれば、さて持て来たり。（『平中物語』第一七段、四八二頁）

（5）我身三位して、丹波の五ケ庄、若狭の東宮河知行して、さておはすべかりし人の、よしなき謀叛おこして、宮をもうしなひ参らせ、我身もほろびぬるこそうたてけれ。（『平家物語』覚一本、巻第四、鵺、三四〇頁）

この「サテ」は副詞のようにはたらく。

①―B．文頭に置かれる「サテ」。

①―B1．話者が交替する対話文の文頭以外の文頭に置かれる「サテ」。

（6）「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ、人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」（『落窪物語』巻之一、九三頁）

（7）帝聞こしめして、「中納言は、いみじき姫を持ちたまふと聞きたり」と仰せあれば、やがて御請け申されつつ、かしづきたまふ。いよいよあたりも輝くほどにぞ見えたまひける。さてこの姫君、八つばかりにやならせたまふ時、母宮、例ならず悩みたまひけり。（『住吉物語』上巻、一八頁）

この「サテ」は副詞や接続詞のようにはたらく。

①―B2．話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」。

（8）「からしや、眉はしも、烏毛虫だちためり」「さて、歯ぐきは、皮のむけたるにやあらむ」とて、（『堤中納言物語』「虫めづる姫君」、四一〇頁）

（9）高倉の院の幼いを時にそっとも違わぬと仰せられて、を涙を流させられた。そこに丹後殿と申した女房衆がいられたがこれを見まらして、さてを譲りわこの宮でこそござらうずれと申されたれば、（『天草版平家物語』巻第三、一九九頁）

この「サテ」は対話の話者の交替を表すマーカー（談話標識）[5]のようにはたらく。

②「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に文や句、語などの形で認められない「サテ」。

これは、内容には依らず、「サテ」前後部の文あるいは文脈などの関係付けを行うための「サテ」である。

②―A．話題の転換を表す「サテ」。

（10）笛、いとうつくしと思す。音もかしこし。さて、殿へ夜更けてわたりたまふ。（『落窪物語』巻之三、二六八頁）

（11）すでに源氏に同心しょうずると返事をしたれば、その

儀を改むるに及ばいで、みなこれを許容つかまつらなんだ。さて肥後の守と言うものを西国えくだされてあったが、これわ鎮西の謀叛を平げて、（『天草版平家物語』巻第三、一七七頁）

②―B．話し手の感動、情意を表す「サテ」。

（12）「ものの例に引き出でたまふほどに、身の人わろきおぼえこそあらはれぬべう。さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだしき御心づかひをば大事と思いて、戒め申したまふ。」（『源氏物語』夕霧、四七一頁）

（13）声も惜しまず泣きたまふ。ためらひて、「さて、いかに聞き出でたまへりや」と問ひきこえたまふ。（『とりかへばや物語』巻第三、三七九頁）

分類の結果を（表三）に示す。

（表三）は中古、中世の「サテ」を、（表四）はそれらをまとめたものである。各表ではその分類に該当する「サテ」の用例数を資料別に示した。これらより、中古から中世にかけての「サテ」は、二．二．で示した①―B．文頭に置かれる「サテ」に分類される用法が多く（「サテ」全用例727例中448例、61．6％）、中でも①―B1．話者が交替する対話文の文頭以外の文頭に置かれる「サテ」が全用例中の多数を占める（「サテ」全用例727例中324例、44．6％〈内訳は中古で157／324、48．5％、中世で167／324、51．5％[6]〉）。この「サテ」は「サ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に認められるものであることから、中古から中世にかけての「サテ」は、副詞的用法で用いられていた例が全用例中で半数ほど見られ、この時期の「サテ」の主用法は副詞的用法であることが分かる。

また、この中古から中世にかけての時期に用例数が躍進したのは②―A．話題の転換を表す「サテ」と、②―B．話し手の感動、情意を表す「サテ」である。②―A．話題の転換を表す「サテ」は中古で9例であったが中世では37例に、②―B．話し手の感動、情意を表す「サテ」は中古で5例であったが中世では127例にと、「サテ」全用例数に対する割合でみると、②―A．が中古1．2％から中世5．1％に3．9％増加、②―B．が中古0．7％から中世17．5％16．8％増加と、①―B．文頭に置かれる「サテ」が中古25．9％から中世35．8％に10％近く増加した（内訳は、①―B1．が中古21．6％から中世23．0％に1．4％増加、①―B2．が4．3％から中世12．8％に8．5％増加）のに比して、②の「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に認められない「サテ」の増加が著しい。本論では特にこの中古から中世にかけて用例数が著しく増加した②を「差し込みのサテ」と名付け、その機能について用例から考察する。さらに、②―A．は接続詞、②―B．は感動詞との

（表三）中古、中世の「サテ」の分類

時代	中古	中世	中古	中世	中古	中世	中古	中世
分類	地頭※1	地頭	地中※2	地中	対話頭	対話頭	対話中	対話中
①—A			5平中 1落窪 1堤 8枕 1浜松 12源氏	1とり 1平覚 5平天			2落窪 2枕 2浜松 17源氏	2住吉 6とり 1保元 5平覚 1平天 1狂言
①—B1	37大和※3 34平中 2　落窪 27枕 1　浜松 17源氏	25住吉 4　平治 29平覚 43平天			1平中 6落窪 3堤 1枕 22源氏 1浜松	2とり 11平覚 12平天 40狂言		
①—B2					1大和 3平中 7落窪 2堤 6枕 12源氏	3住吉 1とり 12平覚 9　平天 68狂言		
②—A	1大和 1平中 2落窪 1浜松	2住吉 2平天			1落窪 3源氏	1保元 11平覚 7平天 14狂言		
②—B					1落窪 1枕 1浜松 1源氏※4	1とり 1保元 1平治※6 7平天※7 89狂言※9	1落窪	1保元※5 2平天※8 25狂言※10

※1「頭」は文頭。※2「中」は文中。※3草子地1例含。※4「さてさて」1例。※5「これはさて」1例。※6「さていかにせむ」1例。※7「さてさて」6例、「さてこれわ」1例。※8「まずはさて」1例、「これはさて」1例。※9「さてこれは」3例、「さてさて」86例。※10「何がさて」24例。「さのみ恐いものでも恐ろしいものでもないわ、さて。」1例。

時代	中古	中世	中古	中世	中古	中世	中古	中世
分類	手頭	手頭	手中	手中	心頭	心頭	心中	心中
①—A							3浜松 18源氏	5とり 1保元
①—B1	1落窪 2浜松				2源氏	1保元		
①—B2								
②—A								
②—B								

（表四）中古、中世の「サテ」のまとめ
※数値はそこに分類される用例数を指す。

時代	中古		中世		計
分類	頭	中	頭	中	
①—A	0	72	0	29	101
①—B 1	157	0	167	0	324
①—B 2	31	0	93	0	124
②—A	9	0	37	0	46
②—B	4	1	99	28	132
計	201	73	396	57	
	274		453		
合計	727				

関わりが予測されるが、本論では特にこの時期において用例数の甚だしい増加が見られた②―B．の「サテ」に注目し、この②―B．に分類される話し手の感動、情意を表す「サテ」から感動詞「サテ」が成立した経緯、原因を述べる。

二．三．「差し込みのサテ」の機能

二．三．一．副詞の「サテ」から「差し込みのサテ」へ

まず、副詞の「サテ」から「差し込みのサテ」までの様相を用例を挙げて確認する。

前述したように「サテ」の確例は中古から見られる。「サテ」はまず指示副詞として、①―A．に分類された用例のように、文中の述語動詞の前に置かれる。

(14)この人の苦しげさをわが身にかへばやとおぼしまどへど、六月もさて過ぎぬ。（『浜松中納言物語』巻第四、三七二頁）

(15)「見る人、後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をばつくろひてまねび出だすに、それしかあらじと、そらにいかがは推しはかり思ひくたさむ。」（『源氏物語』帚木、五七頁）

これらの「サテ」は述語動詞に対して連用修飾語としてはたらく。この文中に置かれていた「サテ」は中古に既に①―B 1．に分類したように

(16)敷物の織物ども、いろいろに染め、縒り、組み、なにかとみなあづけてせさせたまひけり。その物どもを、九月つごもりに、みな急ぎはててけり。さて、その十月ついたちの日、この物急ぎたまひける人のもとにおこせたりける。（『大和物語』三段、二五五頁）

(17)「誰がともなくて、さし置かせて来たまへよ。さて、今日のありさまの見せたまへよ。」（『堤中納言物語』貝合、四五三頁）

と、述語動詞から離れて文頭に置かれた用例が見られる。

また、このような文頭に置かれた「サテ」のうち、①―B 2．に分類したように、

(18)弁の御方、「落窪の君、率ておはせ、一人とまりたまはむがいとほしきこと」と申したまへば、「さて、それがいつかありきしたる。」（『落窪物語』巻之一、三〇頁）

(19)「例ならぬ人はべりてえ近うも寄りはべらず」、「さて今宵もやかへしてんとする。いとあさましうからうこそあべけれ」（『源氏物語』空蟬、一二二頁）

と、話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」の用例も中古から見られる。[7]

古代語の「サテ」は照応用法と観念用法をもってはたらいていたが、中世に観念用法を失い、中世後期から近世に直示用法を獲得した[8]と考えられるが、「サテ」の主用法は古代語から現代語まで照応用法であり、[9](16)、(17)の用例のように、

また（18）、（19）の用例のように特に話者が交替する対話文での用例のように、文頭に置かれて述語動詞との修飾―被修飾関係から解放された「サテ」は、「サテ」の前文脈の内容を指示して「それを踏まえて」、「そういうわけで」と、その内容を「サテ」以降の文に関係付ける。[10] このような「サテ」は機能は副詞であるが文中での出現位置は文頭であって接続詞と同様であり、副詞と接続詞の両方の性質を有していると考えられる。この（16）～（19）の「サテ」は、「サテ」の前文脈に「サ」で指示される内容が、具体的に文や句、語などの形で認められる。しかし次のように②―A．に分類される、

（10・再掲）笛、いとうつくしと思す。音もかしこし。さて、殿へ夜更けて渡りたまふ。（『落窪物語』巻之三、二六八頁）

のような話題の転換を表す「サテ」、また②―B．に分類される、

（3・再掲）几帳のもとに寄り給ひて、「さていかがおはします。人あまたさぶらふや」と問ひ給へど、（『浜松中納言物語』巻第四、二九九頁）

のような話し手の感動、情意などを表す「サテ」などの例、つまり「差し込みのサテ」の例では、「サテ」の前文脈に「サ」で指示される内容が、具体的に文や句、語などの形で認められない。これは、これらの例における「サテ」は副詞としてはたらいていないことを意味する。

二．二．の最終段落で前述したように、「差し込みのサテ」は中古から中世にかけての時期に用例数が増加している。

これらは、「サテ」の一部に中古から中世にかけての時期に、語として本質的な変化が生じていたことを意味すると思われる。そこで、中古の例を参照しつつ、「差し込みのサテ」に分類される中世の例を中心にさらに詳しく見ていくこととする。

二．三．二．「差し込みのサテ」の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」と疑問文の結びつき

（表四）を見ると、「差し込みのサテ」の用例が見られる環境には偏りがあることが分かる。②―A．の話題の転換を表す「サテ」は地の文、対話文の文頭に、②―B．の話し手の感動、情意を表す「サテ」は対話文に用例は集中している。これは同じ「差し込みのサテ」でも②―A．と②―B．の性質が異なることを意味すると思われる。前述したように本論では②―B．に分類される「サテ」を中心に述べるので、今後はこの②―B．話し手の感動、情意を表す「サテ」について見ていく。

前述したように、②―B．話し手の感動、情意を表す「サテ」は、対話文に用例が集中していることから、この用法は口頭表現から発生した可能性が高いと思われる。

この②―B．話し手の感動、情意を表す「サテ」の全用例を確認し、（表三）で最も用例数が多かった中世の対話文・文頭の例を見ると、「サテ」に疑問文が続く形式が見られる。それらは、

・**（「サテ」＋疑問詞疑問文[11]）の形式を持つ例（26／99、26．3％）**

（20）ためらひて、「さて、いかに聞き出でたまへりや」と問ひきこえたまふ。（『とりかへばや物語』巻第三、三七九頁）

・**（「サテ」＋疑問詞のない疑問文）の形式を持つ例（4／99、4％）**

（21）さて失われうずる有様かと仰せらるれば：（『天草版平家物語』巻第四、三八九頁）

のような例であり、これらの（「サテ」＋疑問文）の形式を持つ例が②―B．にはまとまって見られることが分かる。

疑問文の形を取る疑問表現について山口（一九九〇）は、「疑問表現は一般に詠嘆性を帯びやすいが、その原因はこのような疑念や問いかけの情意的側面に根ざすと考えてよいだろう。疑問表現における事態の不透明な捉え方はおのずから主体の情意的抵抗感を伴い、そのため疑念はその解消志向としての問いかけに発展することになるが、詠嘆と呼ばれているものも、いわば与えられた事態を認めるに要する情意的抵抗感の総称であるといって誤りはないと思う」（一二頁）、「詠嘆性の情意の中で最も基本的なものは、与えられた事態に対する驚きであると見てよかろう。しかし、そのありようは場合によって、はじめて気づいたことに伴う軽い意外感にとどまるものから、強い不可解感やショックを伴う驚きに及ぶ広がりをもつであろう。（略）与えられた事態への驚きには、その事態に対する主体の好悪によって後述の悲しみ・怒り・後悔・喜び・賞賛・羨望などの情意が両立して認められることも多い」（四七～四八頁）と述べる。山口（一九九〇）が述べるように、本論でも疑問とは話し手の強い疑念、つまり感情、感動、情意であると考える。そのため、

（22）さていかにをのをの、俊寛をばついに捨て果たさせらるるか？　これほどにわ存ぜなんだ：（『天草版平家物語』巻第一、七六頁）

のような強い情意（詠嘆）の現れとも疑問（問いかけ）の現れとも受け取れる形式や、

（23）津の国、河内の源氏も同じやうに力を合わせて、淀、川尻から攻め入るとののしれば、平家わこれを聞いて、さてこれわなんとしょうぞ？　ただ一所で何ともならうずると言うて、宇治、瀬田の手をもみな呼び返された。（『天草版平家物語』巻第三、一七八～一七九頁）

のような、時に反語の形で強い情意（驚き）の現れとも疑問（問いかけ）の現れとも受け取れる形式も例として見られると思われる。

そこで、口頭表現の中で「サテ」の後に疑問文が後続する

形式が多く見られるという構文の形式の面からの支えと、その疑問文が結局は感動文、情意文であり、話し手の感情を表すという構文の意味内容の面からの支えの両面から、疑問文（話し手の感動、情意を表す文）を後続する「サテ」が、まず後続する話し手の感動、情意を強調するようになり、その後に「サテ」自体が話し手の感動、情意を表す語、つまり感動詞としてはたらくようになった経緯が考えられる。

この後、形式としては疑問文（話し手の感動、情意を表さす文）であるが、問いかけに対する返答というよりは挨拶に対する返事を要求する

（24）船頭「さて、何と今日は寒いことではござらぬか。聟「まことに、殊のほか寒いことでござる。（『狂言集』船渡聟、二八八頁）〈「サテ」は話し手である船頭の実感的な情意を表している。〉

などの例や、「サテ」に疑問文が後続しない

（25）檀那「さて只今一飯を（の）申しつけましたによって、程なう出来ませう。」（『狂言集』魚説経、四一三頁）〈「サテ」は話し手である檀那の認識的な情意を表している。〉

（26）有徳「オオ、それでこそよけれ。盗人「さて、私はもはやお暇申しまする。」（『狂言集』蜘盗人、四八八頁）〈「サテ」は話し手である盗人の意志的な情意を表している。〉

などの例では、「サテ」が後続部の強意、強調を表し、その後「サテ」自体が話し手の情意、感動を表す感動詞としてはたらくようになったと考えられる。

そして、それが「サテサテ」と重なる形でも用いられ、

（27）さてさて俊寛と康頼がことわなんとあらうぞと、言われたところで、（『天草版平家物語』巻第一、七一頁）

（28）さてさてわれら三人わ罪も同じ罪、配所も一つところぢゃに、なんとしたれば赦免の時、二人わ召しかえされて、一人ここに残らうぞ？（『天草版平家物語』巻第一、七四頁）

（29）さてさて果てしもないことを仰せらるる：（『天草版平家物語』巻第三、一五六頁）

（30）丹波「さてさて我御料は、最前から戯れ深い人ぢゃ。（『狂言集』松楪、四五頁）

などとそれぞれ疑問（27）、反語（28）、感嘆（29）、（30）の形も見られるようになったと思われる。[12]

（「サテ」＋疑問文）の結びつきのうち、特に「さていかに」「さて何（なに／なん）と」の形式は中世以降定型表現[13]となり、また、

（23・再掲）平家わこれを聞いて、さてこれわなんとしょうぞ？（『天草版平家物語』巻第三、一七八～一七九頁）

の形式から、「サテ」が文中に置かれた

（31）これはさていづくえござぁるぞ？（『天草版平家物語』巻第三、一八五頁）

（32）まづわさて退屈も召されぬを人ぢゃ。（『天草版平家物語』巻第二、一〇七頁）

などの形式、また前述した「さて何（なに／なん）と」の形式から「サテ」が文中に置かれた

（33）すっぱ「何がさて心得た。」（『狂言集』金津、四三〇頁）

も見られるようになったと考えられる。[14]「サテ」が感動詞としてはたらくようになる出発点としての、疑問文（話し手の感動、情意を表す文）との結びつきは、中古の用例からも認められる。[15]初めは（「サテ」＋疑問文の形式を持つ文）という形を取り、後続する疑問文（話し手の感動や情意を表す文）を強調するようにはたらいていた「サテ」は、次第に疑問文ではない文も後続するようになり、「サテ」自体が話し手の感動や情意を表す感動詞としてはたらくようになったと思われる。[16]

「差し込みのサテ」の一部[17]はこのような感動詞としてはたらくようになった「サテ」であり、それには「サテ」に後続する疑問文（話し手の感動、情意を表す文）の関与が考えられる。

三　まとめ

以上本論で述べたことをまとめる。

その指示する内容が前文脈に具体的に認められない「サテ」に注目し、これを「差し込みのサテ」と名付けてその機能を「サテ」の機能全体の中で位置付け、それが中古から中世期にかけて増加していることを指摘した。さらにそれらの「差し込みのサテ」の一部が感動詞として成立した経緯、原因を考察した。中世期の対話文に特に増加した用例に注目すると、初めは（「サテ」＋疑問文（話し手の感動、情意を表す文））の形式を持つ文という形を取り、後続する疑問文と結びついて疑問文が表す話し手の感動や情意を強調するようにはたらいていた「サテ」は次第に疑問文ではない文も後続するようになり、「サテ」自体が感動詞としてはたらくようになったと考えられる。

（注）

（1）　中古以前の上代の用例として、「網児（あご）の山五百重（いほへ）隠（かく）せる佐堤（さて）の崎さて延（は）へし児（こ）が夢（いめ）にし見ゆる」市原王（いちはらのおほきみ）の歌一首、『萬葉集』巻第四・六六二番歌）（原表記：網児之山　五百重隠有　佐堤乃埼　左手縄師子之　夢二四所見）がある。しかしこの例については、「上代語にサ・サテの確例がないため、疑問がなくもない。」（『萬葉集』①・三三七頁頭注、『新編日本古典文学全集6』）とある。また、以下用例は『新編日本古典文学全集』（小学館発行）による。用例脇の傍線は論者による。頁数は同全集の用例が掲載された頁を表す。

（2）　西田（２００１）・一三八頁。

（3）　岡崎（２００８）・一九九頁。なお、同岡崎（２００８）によれば、「接続詞的用法としては、前件と後件の関係から、Ⅱ―

A条件、Ⅱ―B列叙・転換に分類できる。（なお、現代語で見られる行動の区切り目を示すマーカーとして働くものを、Ⅱ―C行動とする。但し中古には例を見出すことはできない）。」（同・一九二頁）として、また、「Ⅱ―A条件」、「Ⅱ―B列叙・転換」に関してはそれぞれ、「Ⅱ―A条件　前件と後件が、条件関係（岡崎注：「条件関係については山口（一九八〇）を参照した。」（岡崎（２００８）・二〇一頁）を示すもの。現代語においては「ソレデ・デハ・ソレデモ・ソウシタラ」等と、かなり近い働きをする。」（同・一九二頁）、「Ⅱ―B列叙・転換　現代語において列叙的用法を持つ接続詞「累加的（ソシテ、ソレデ、ソレカラ）」「並列的（及ビ、並ビニ、マタ）」（略）と、さらに「トコロデ」とかなり近い働きをしている」（同・一九三頁）と、説明する。

（4）　この分類は拙稿「古典物語作品における談話分析―話者交替の位置に現れる「サテ」について―」（百瀬（２０１７）・三二～三三頁）で示した分類を一部修正して用いた。

（5）　百瀬（二〇一七）。

（6）　ちなみに、①―B２．話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」は、「サテ」全用例数中の１２４／７２７、１７．１％である。

（7）　百瀬（二〇一七）。

（8）　岡崎（二〇〇二）・七頁）、「サ系列「サ」は、中古では照応・観念用法であった。そして中世には観念用法を失い、中世後期から近世に現代語のソ系「ソウ」とほぼ同じ直示用法を獲得する。」による。

（9）　（岡崎（二〇〇二）・三頁）、「ソ系列（ソ系）の中心的用法は、上代から現代まで照応用法である。」による。

（10）　「サテ」の文中から文頭への出現位置の変化は、「サテ」が述語動詞との結びつきよりも前文脈に対する指示という機能を強めるようになったことによると考える。言い換えればこれは、「サテ」の接続助詞「テ」よりも指示副詞「サ」の機能が強くなったことを表すと思われる。この、文の結束を表す手法が「後部と関係付ける」ことから「前部と関係付ける」ように変化したことについては、「サテ」のみでなく「サテ」と関係付けられる文の文末形式と「サテ」との関わりについても考える必要があり、今後の課題とする。

（11）　この疑問詞疑問文の疑問詞とは、「いかに」（「さて、いかに聞き出でたまへりや」（『とりかへばや物語』三七九頁）、「いづち」（「さて、いづちへかわたらせたまふべき」）（『保元物語』三一七頁）、「いかが」（さていかがござったぞと申したれば）（『天草版平家物語』六頁）、「なに」（さてなにとござるぞと、申されたれば：）（『天草版平家物語』四〇頁）、「なぜに」（さて今までわなぜにをそかったぞ）（『天草版平家物語』一九〇頁）、「なんと」（さてをのれらわなんとしょうぞ）（『天草版平家物語』三八九頁）、「どれ」（「さて、こなたはどれへござるぞ。」）（『狂言集』船渡聟、二八八頁）、「如何様（いかやう）」（「さて、御用と仰せらるるは如何様なことでござるぞ。」）（『狂言集』狸腹鼓、五〇三頁）などを指す。

（12）　この「サテサテ」の形式が変化した「サアサア」の形式が『狂言集』では五四例、これがさらに変化して「ヤアヤア」が三例、「ヤイヤイ（ヤイ）」が二一例、「ヤンヤヤンヤ」が一七例、「イヤイヤ」が一六例、「ヤレヤレ」が八例、「エイエイヤットナ」が一一例「エーイエーイ」が七例と、中世中～後期にこの形式は豊富になる。

（13）　『天草版平家物語』で「さていかに」六例、「さて何（なに／

なん）と」二例が見える。

（14）中世の対話文・文中に見られるこれらの「サテ」の例は論中（32）の「これはさて」（一例）、（33）「まづわさて」（一例）、（共に『天草版平家物語』の例）、（34）「何がさて」（二四例）（『狂言集』の例）のほか、「これは蓬莱ヶ島の鬼というて、さのみ恐いものでも恐ろしいものでもないわ、さて。」（『狂言集』節分、三六〇頁）（一例）の例がある。

（15）中古（対話文・文頭）の例は、「いと聞かまほしくこそ。さて笛忘れて来にけり。取りて賜へ。」（『落窪物語』巻之一、九八頁）、「さて何事ぞ」（『枕草子』第六段、三八頁）、「さていかがおはします。」（『浜松中納言物語』巻第四、二九九頁）、「さてさてをかしかりける女かな」（『源氏物語』箒木、八六頁）、中古（対話文・文中）の例は、「また、『若菜まゐる』とて、年のはじめにすること、さて、『八講』と言ひて、経、仏かき、供養することこそあめれ。」（『落窪物語』巻之三、二五六頁）である。

（16）なお、「なんと」の形式をもつ文について、笹井（二〇〇六）は「「なんと」型感動文」として扱う。本論もこの「なんと」等の疑問詞の形式を持つ疑問文について、論じたように話し手の感動、情意などを表す感動文として考えておりその点、笹井と同じなのであるが、「疑問詞の形式を持つ文」の意味で論中の項目では「疑問文」とした。

（17）「差し込みのサテ」の一部は本論で述べたように感動詞としてはたらく「サテ」であるが、他の一部（感動詞としてはたらくのではない、②に分類される「サテ」）は、接続詞としてはたらくようなったと思われる。この感動詞と接続詞の「サテ」の関係であるが、論者の現段階での見通しでは、

（i）主に中世期の「サテ」を見た際に、感動詞の「サテ」は対話文（口頭表現）に現れ、接続詞の「サテ」は地の文に現れるなど、その出現環境が異なること。（ii）同じ中世期に感動詞の「サテ」も接続詞の「サテ」も見られ、その出現時期に差が認められないこと。（iii）話し手の感動、情意を表す感動詞と、文脈の前後の関係付けを行う接続詞は語としての機能が異なり、両方とも副詞由来の語であるという関係はもちろん認められるが、一方が一方の元となるような直接的な派生関係は考えがたいこと等より、感動詞の「サテ」から接続詞の「サテ」が発生したとは考えていない。これについては別稿を期したい。なお、本論での「サテ」のように、元来は文中に位置して命題の中で実質語としてはたらいていた語がある種の文との結びつきのような構文的な事情等から命題の外に出て機能語になっていく（本論ではここまでを扱っているが、語によっては談話標識になっていく）変化の過程は、Elizabeth C. Traugott (1995) が述べた "indeed", "in fact" などが構文的な統語条件によって文中で実質語である副詞としてはたらいていたものから文修飾副詞のように、そして談話標識としてはたらくようになる変化の過程とかなり重複的であると考えられ、ある種の言語の用法変化の過程としては普遍性があると思われる。

（補注）

本論では用例採集資料として扱わなかった、『竹取物語』、『伊勢物語』、『うつほ物語』中に見られる、本論中で「差し込みのサテ」の〈②―B．話し手の感動、情意を表す「サテ」〉に分類される用例には、本論の主旨に反するものは見当たらなかったことを申し添える。

（参考文献）

安達太郎（二〇〇二）「現代日本語の感嘆文をめぐって」『県立広島女子大学国際文化学部紀要』10、広島女子大学
市村太郎（二〇一四）「副詞「ほんに」をめぐって―「ほん」とその周辺―」『日本語の研究』第一〇巻第二号、日本語学会
大鹿薫久（一九八八）「感動文の構造―句と文についての把握―」『ことばとことのは第五集』、和泉書院
大鹿薫久（一九八九）「感動文の構造（承前）―句と文についての把握―」『ことばとことのは第六集』、和泉書院
岡崎友子（二〇〇二）「指示副詞の歴史的変化について―サ系列・ソ系を中心に―」『国語学』第五三巻第三号、国語学会
岡崎友子（二〇〇六）「指示副詞のコ・ソ・ア体系への推移について」『国語と国文学』第八三巻第七号、東京大学国語国文学会
岡崎友子（二〇〇八）「指示語「サテ」の歴史的用法と変化について―『源氏物語』を中心に―」『国語語彙史の研究』二十七、国語語彙史研究会編
岡崎友子（二〇〇九）「接続詞「サテ」について―現代語の用法とテクスト―」『就実論叢』第三八号、就実大学
岡崎友子（二〇一〇）「サテの歴史的変化について―中世天草版平家物語を中心に―」『語文』第九二・九三輯、大阪大学国語国文学会
荻野千砂子（二〇〇〇）「接続詞「サテ」に関する一考察」『純真紀要』四一、純真女子短期大学
尾上圭介（一九八六）「感嘆文と希求・命令文―喚体・述体概念の有効性―」『松村明教授古稀記念国語研究論集』、明治書院
川越菜穂子（一九九五）「ところで、話はかわるけど―Topicshift marker について―」『複文の研究（下）』仁田義雄編、くろしお出版
京極興一・松井栄一（一九七三）「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座6　接続詞・感動詞』、明治書院
金水敏・木村英樹・田窪行則（一九八九）『指示詞　日本語文法セルフ・マスターシリーズ　寺村秀夫企画4』、くろしお出版
金水敏・田窪行則編（一九九二）『指示詞　日本語研究資料集第1期第7巻』、ひつじ書房
阪倉篤義（一九九三）『日本語表現の流れ』岩波書店
笹井香（二〇〇六）「現代語の感動文の構造―「なんと」型感動文の構造をめぐって―」『日本語の研究』第二巻第一号、日本語学会
田中章夫（一九八四）「4接続詞の諸問題―その成立と機能―」『研究資料日本文法第4巻修飾句・独立句編　副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院
西田隆政（二〇〇一）「源氏物語の指示語「さて」の用法―平安和文での接続詞的用法の展開をめぐって―」『国語語彙史の研究』二十、国語語彙史研究会
長谷川哲子（二〇〇〇）「転換の接続詞「さて」について」『日本語教育』第一〇五号、日本語教育学会編
浜田麻里（一九九九）「ソシテとソレデとソレカラ―添加の接続詞―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』、くろしお出版
浜田麻里（一九九九）「サテ、デハ、シカシ、トコロデ―転換の接続詞」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』、くろしお出版

森岡健二（一九七三）「文章展開と接続詞・感動詞」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座6　接続詞・感動詞』明治書院
森田良行（一九七三）「感動詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座6　接続詞・感動詞』明治書院
森山卓郎（二〇〇六）「「添加」「累加」の接続詞の機能―「そして」「それから」などをめぐって」益岡隆志、野田尚史、森山卓郎編『日本語文法の新地平3』、くろしお出版
山口堯二（一九九〇）『日本語疑問表現通史』明治書院
山田孝雄（一九三六）『日本文法学概論』宝文館
Traugott, Elizabeth Closs（1995）THE ROLE OF THE DEVELOPMENT OF DISCOURSE MARKERS IN A THEORY OF GRAMMATICALIZATION Paper presented at ICHL XII, Manchester 1995; Version of 11/97（http：//www.stanford.edu/~traugott/ect-papersonline.html より二〇一八年八月三一日閲覧。）

（参考資料）
松村明編（一九七一）『日本文法大辞典』明治書院
中村幸彦、岡見政雄、阪倉篤義編（一九九九）『角川古語大辞典』角川書店
日本語文法学会編（二〇一四）『日本語文法事典』大修館書店

（用例採集資料）
・『大和物語』『平中物語』、『落窪物語』、『枕草子』、『堤中納言物語』、『浜松中納言物語』、『源氏物語』、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』、『住吉物語』、『とりかへばや物語』、『狂言集』以下全て『新編日本古典文学全集』（小学館刊行）に拠った。
・『天草版平家物語』は江口正弘著（一九八六）『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院刊行）に拠った。
・検索サイトジャパンナレッジ http://japanknowledge.com/
・国立国語研究所『日本語歴史コーパス（CHJ）』（コーパス検索アプリケーション『中納言』）
https://chunagon.ninjal.ac.jp/
（最終アクセス日　共に二〇一八年八月三〇日）

（ももせ・みのり　本学大学院博士後期課程）